愛知の博物館　№89

碧南市藤井達吉現代美術館

市制60周年を期して平成20年4月5日にオープンした。建物は旧商工会議所を改修・増築したもので、美術館としては珍しい成り立ちである。神社仏閣が集中し、寺町としても知られる大浜地区の景観に合わせた黒い外観を持ち、第16回愛知まちなみ建築賞など3賞を受賞した。館の基本理念では碧南市出身で日本近代工芸の先駆者のひとりであった藤井達吉の顕彰、教育普及事業、まちづくりの拠点施設としての役割を掲げている。これを踏まえながら、広い視野を持って型にはまらない制作を行った藤井達吉の精神を見出せる現代作家の発掘をも含め全国に発信する美術館を目指している。

目　次

●愛知県博物館等職員研修会 …… 2
●第33回東海三県博物館協会研究交流会 …… 3
●「平成20年度部門別研修会」の報告 …… 4
自然科学部門研修会・歴史民俗部門研修会・美術部門研修会

愛知県博物館等職員研修会

平成20年度愛知県博物館等職員研修会は、平成20年10月22日（水）、愛知芸術文化センターにおいて開催された。本年は第33回東海三県博物館協会研究交流会が同日に開催されることもあり、午前中のみの日程であったが、47名にご参加いただいた。

今回の研修会では、動物園をはじめとした自然系博物館に着目した。博物館を取り巻く状況は年々厳しくなり、活動内容の充実だけではなく、集客力や採算性が重視されている。そんな中で自然系博物館は、本来の目的である資料の保存・研究から逸脱することなく、その展示方法の工夫によって注目を集め、研究者からも高い評価を得ている。本研修会では、動物園が取り組んでいる事例に学び、博物館が新たな一歩を踏み出す手がかりの発見の場にすることを目的とした。

まず行われた講演会では、帝京科学大学教授の石田おさむ先生に、「動物園から学ぶ、資料の見せ方・来館者の心のつかみ方」と題してご講演いただいた。（写真1）石田先生は長く動物園で勤務された経験から、動物園における教育・普及活動に主眼を置いてお話いただいた。多様な動物を見せることから自然保護の主体へと変化してきた動物園の役割を、いかに押し付けることなく来館者に訴えかけるのか、という点について、来館者のニーズも踏まえながら、様々なアプローチでご提示いただいた。

写真1　帝京科学大学教授　石田おさむ先生

続いて、事例発表として、プレック研究所動植物園設計・研究センター長の安河内泰男氏より、「動物園展示の今」と題したご発表をいただいた。（写真2）実際に動物園の設計に携わられた立場からの発表では、動物園展示がどのような方向に変わってきているのか、ということが明らかになった。時代の要請によって、生息地の環境や、動物の生態・行動を見せる展示に変わっていった様子を、実際の展示方法を交えてお話いただいた。

写真2　プレック研究所動植物園設計・
研究センター長　安河内泰男氏

いずれのお話も、実際に業務に携わられたお立場からのものであったため説得力があり、参加者は熱心に耳を傾けていた。本研修会の成果を各館（園）がその運営に活かされることを願ってやまない。

（名古屋市博物館　塚本精蔵）

第33回東海三県博物館協会研究交流会

東海三県（愛知・岐阜・三重）の博物館関係者が一堂に会して交流を深めるとともに、それぞれの館（園）が抱える課題などについて事例発表や意見交換をおこない、今後の博物館活動の充実・発展に資する恒例の研修会を愛知県博物館協会が主催して開催した。

◎平成20年10月22日（水）13:30～
会　場　愛知芸術文化センター
参加者　85名　愛知県　52名
　　岐阜県　22名
　　三重県　11名
テーマ「来館者の心をつかむ
　　～自然系博物館に学ぶ～」

博物館をとりまく状況は年々厳しくなり、集客力や採算性を念頭に置く必要性にせまられている。そういった状況の中、いくつかの自然系博物館（園）は、その展示工夫によって話題を集め、なおかつ、研究者からも高い評価を受けている。本研究交流会では、自然系博物館（園）が取り組む事例に学び、新たな展開へのてがかり発見の場にすることを軸に、各館（園）が相互に交流した。

①愛知県の事例発表
「展示改装する力がうむ魅力的な展示」
　豊橋市自然史博物館
　　副館長　松岡　敬二
「動物たちのメッセージを伝える
　　～当園の実践から～」
　名古屋市東山動物園
　　獣医師　中村　彰
「来園者の心をつかむために
　　～日本モンキーセンターの取り組み～」
　日本モンキーセンター
　　学芸員　高野　智

②三重県の事例発表
「志摩マリンランドの現状から」
　志摩マリンランド
　　館長　大久保　修三

③岐阜県の事例発表
「カエルフェスタ2008」
　岐阜県世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ
　　展示飼育チーム主任　堀江　真子

④パネル展示による事例発表・質疑

◎平成20年10月23日（木）
愛知県博物館協会加盟館（園）の自由視察

来年度（第34回）は岐阜県において開催される予定。

豊橋市自然史博物館　副館長　松岡敬二氏

平成20年度部門別研修会

＜自然科学部門研修会報告＞

平成21年2月6日（金）、自然科学部門研修会「三次元で資料の中を見る～マイクロCT活用の可能性を探る」を8館9名の参加で開催した（写真1）。会場は、名古屋市千種区にある愛知学院大学歯学部で、参加者は歯科資料展示室に集合。展示室委員会委員長の中垣晴男教授（口腔衛生学講座）からのあいさつのあと、子安和弘氏（解剖学講座）からマイクロCTの原理と応用についてレクチャーがあった。

マイクロCTは軟X線を用いた透過型の3次元スキャナーともいうべき物で、資料を破壊することなく測定し、多方向から必要な断面において観察でき、またデータからムービー画像にも加工することもできる。子安氏によれば、博物館資料の研究や維持管理のみならず、画像展示資料・インターネット展示資料の作成、立体プリンター（3次元データーを基に合成樹脂の模型を自動的に作るもの）への応用などにも大いに活用できるのではないか、みんなで探ってみたいとのことであった。

使用したのは顎形態分析室にある2台の機器。島津マイクロフォーカスX線検査装置SMX-225CTとRigaku実験動物用3DRmCT（写真2）である。前者は試料台が回転する方式で、金属の内部や顎骨などに向いている。後者は、医学用に特化した器械で、試料台は固定され、X線とその受光部が試料のまわりを回転するもので、麻酔したマウスなど生体も測定できる。前者を子安氏に、後者を林達秀氏（歯科理工学講座）に操作していただいた。

写真1　参加のみなさん

写真2　Rigaku3DRmCTについて説明する林氏

写真3　試料の固定方法を工夫

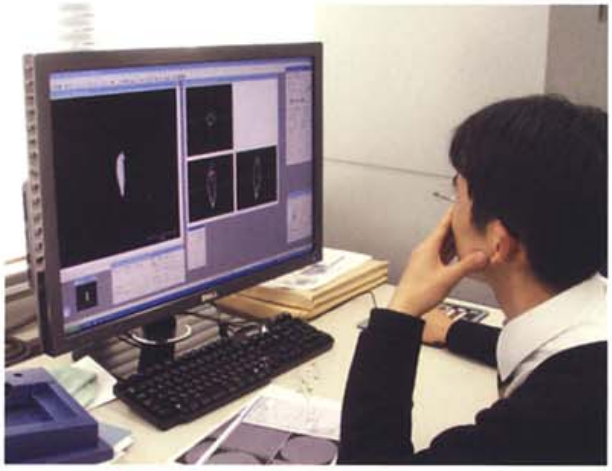


写真4　測定したデータを確認

研修参加者には、大きさが10cm角までの測定してみたい資料を持って来てもらった。集った資料は、歯、キセル貝、矢じり、コンプレックス（＝複雑な）折り紙で作った恐竜やアルコール固定標本（カニ、魚）など多様であった。まず試料を台に固定し、器械の中に入れて測定の位置決めや電圧の調整をする（写真3）。実はここがみそで、試料に最適な固定方法や測定条件を決めていく必要がある。ふだんは歯や骨の研究に使っているので、測定前の調整がむずかしい。しかしX線の測定時間は数分でOK。測定後、データを別のコンピューターに移して、回転する動画や表面から内部へ断面を順次見ていく動画などに加工していく（写真4）。今回きれいにデータがとれたキセル貝(写真5)、矢じりと歯は、動画まで作製できた。折り紙もその断面で紙が複雑に折りたたまれているようすが画面で確認できた。写真6は、Rigakuの器械で測定した生物標本（カニ）で、3方向の断面が自由に設定できるのを見せていただいた。

今回の研修では、参加者が自分で機器を操作するというわけにはいかなかったが、参加者は熱心に操作や画面を見ていて、あっという間に終了時間になり、延長してしまった。しかし、先端機器を体験でき有意義であった。各自の博物館でマイクロCTを購入するのは経費がかかるので無理であろう。しかし、今後、測定したい物があれば相談にのれるかもしれませんとのご提案も子安氏からいただけた。

さて、愛知学院大学歯学部歯科資料展示室は、1986年に開室し、2007年に愛博協に入った大学博物館である。歯学部の研究者が兼務する展示室委員会が運営している。火・金曜日には、もう一人専任のスタッフがつき、一般にも公開している。愛博協に加盟して「おでかけガイド」を見ての来館者がふえた、今回の研修を引き受けて協会の活動が分かったと喜んでいただけた。県下に大学博物館や将来の学芸員や博物館理解者を育てるコースを持つ大学がいくつもあるが、愛博協の活動ともっと接点を増やしていければと願う。

最後に、今回の研修では、大学の先端研究機器を快く使わせていただき、愛知学院大学ならびに子安氏始め展示室スタッフや展示室委員会のみなさんにたいへんお世話になった。紙面をもってお礼申し上げたい。

（尾坂知江子　名古屋市科学館）

写真5　島津SMX-225CTで測定したキセル貝の画像

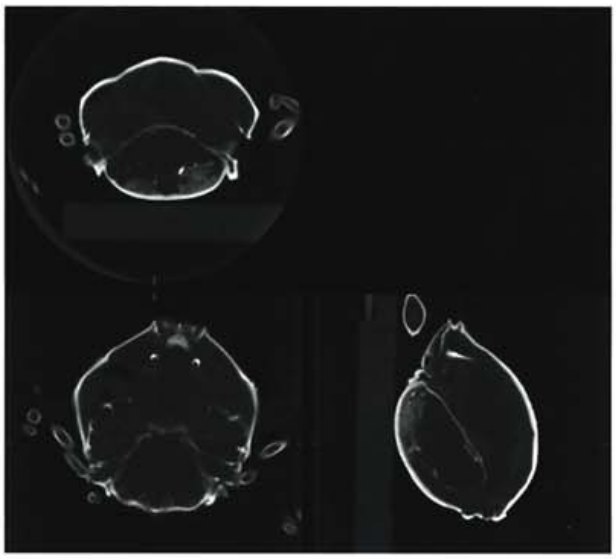


写真6　Rigaku3DRmCTで測定したカニの画像

＜歴史民俗部門研修会報告＞

このたびの歴史民俗部門研修は、豊橋市美術博物館において「生きた文化財に触れる～祭礼と建築」と題して行った。開催日は建国記念日にあたる2月11日（水・祝）。この日は豊橋市美術博物館の近隣にある安久美神戸神明社で国指定重要民俗文化財の「鬼祭り」が毎年執り行われている。館の目と鼻の先で、こうした貴重な神事が行われるという地の利を活かして（さらに時期的にも好機である）、このたびの研修は実際に祭礼をみるという機会とした。また、今年度7月に新たに国より重要文化財に指定された豊橋ハリストス正教会が神明社に隣接しているため、そちらもあわせて見学を行った。

参加者は23館32名（主催館からの参加者も含む）、研修内容に則して民俗系の博物館・資料館からの参加者が多数を占めた。

「三河の鬼文化～＜鬼祭＞を中心に」

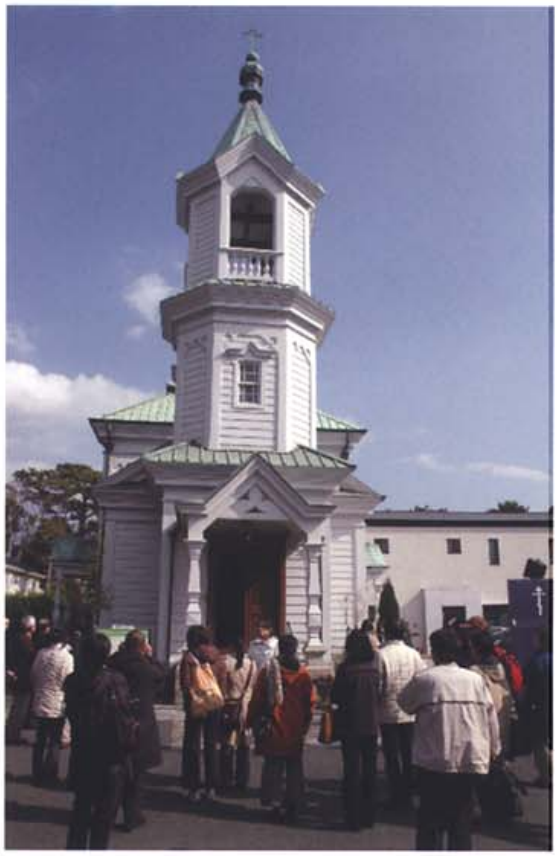
神事見学を前に、奥三河の花祭を長年研究し、存続活動にも尽力してこられた山崎一司氏に三河の鬼文化についてお話いただいた。「鬼の系譜」として、厄災を追い払うという儀式を『続日本紀』にある「土牛大儺」（706年の条）に求め、以後「方相」による宮中追儺の儀、寺院の修正会などに「鬼を追い払う儀式」の展開をみた。また、修正会の鬼役に猿楽師などの関与もあり、豊橋の鬼祭りにもその影響を指摘された。

事例としては、豊橋の鬼祭り、岡崎市・滝山寺の火祭り（鬼祭り）のほか、稲沢市・国府宮のはだか祭にも言及。本来は儺請負人である神男に鬼の変形をみた。

山崎氏のライフワークである花祭りについては、時間が無いため今回お話いただけなかったのが残念であり、僻地での神事存続の現実も含め、お聞きしたいお話もまだまだあったが、鬼を払う神事の由来やヴァリエーションを知る貴重な機会となった。

豊橋ハリストス正教会見学

豊橋市庁舎13階展望レストランでの昼食を挟んで、豊橋ハリストス正教会に移動。同教会は大正2年に河村以蔵によって作られた木造正教会で、堂内にはロシアイコンとならんで女性イコン画家山下りんのイコンも掲げられている。成り立ちや建物の構造を簡単に説明したあと、堂内に入ってこれらのイコンを鑑賞。その後、建物の周囲を巡り、安久美神戸神明社へと向かった。



安久美神戸神明社「鬼祭り」

神明社のご好意により、今回は特別に拝殿からの見学が許可された。神事の最中にも関わらず人数分の座席を設けていただくなど、神明社の方々にも多大なご配慮をいただいたが、高いところから境内を一望することができ、壮観であった。神事は「天狗と鬼のからかい」で、2日間にわたる祭の要である。とはいえ、その内容は鬼と天狗が鳥居と八角の儀調場の間を舞いながら往復を繰り返すというもので、動きはきわめて単調である。そのぶん古来からの神楽に近いとも考えられる。祭りは鬼が天狗に敗れ、白い粉（小麦粉）やタンキリ飴を撒く氏子たちとともに退散するという場面でクライマックスを迎えた。つぶてや豆で追い払われるのではなく、鬼の側が物を投げるというのも、追儺の儀の変容として興味深い。鬼の撒く粉を浴び、飴を食べれば、無病息災が得られるという、福神のような役割もこの鬼は担っている。このたびは神社側から参加者にこのタンキリ飴をお土産としていただいた。

この後、神事は夜まで続くが、これを区切りに解散し、各々境内を自由散策しつつ再び美術博物館に再集合した。閉会の挨拶の後は閉館時間まで開催中の収蔵品展「物語る絵画」を鑑賞する機会とした。この収蔵品展では現代に生き続ける物語として、能狂言や神楽を主題とする近代絵画の1室も設けているが、その主要テーマは奥三河の「花祭り」の鬼や般若の姿である。今回のテーマである鬼を画家の視点で紹介するとともに、こうした祭が画家たちにとっても制作意欲を掻き立てる素材であったことを示す好例といえる。

今回の研修は博物館活動についての内容を離れ、見学を主体とした結果となった。有形無形を問わず地域に残る貴重な文化資源との関わりをどのように博物館が意識し、活動に盛り込んでいくのか、など展開すべき事項はあり、今回そこまで至らなかった点が悔やまれる。

とはいえ、今回の内容は生きた文化財に触れる得がたい機会であり、こうした機会と場を与えてくれた安久美神戸神明社および豊橋ハリストス正教会に改めて謝意を表したい。

（豊橋市美術博物館　丸地加奈子）

氏子さんからも話を聞く

拝殿から見た境内の様子

＜美術部門研修会報告＞

平成20年度美術部門研修会は、平成21年2月18日（水）、愛知芸術文化センター　12階アートスペースEFを会場に行った。参加者は美術以外の分野の方もご参加いただき、総勢33名であった。

研修のテーマは、「美術館活動の広がり　－境界をこえて－」とし、日々変化していく美術館活動について取り上げ、3件の事例発表を聞き、参加者それぞれが、各館が直面する課題への様々なヒントを得、同時に、美術館を取りまく今日的な問題を考えることを目的とした。

伊藤優子氏（元･名古屋市美術館学芸員）には、「こどものための普及活動　名古屋市美術館での実践から」と題し、この地域で先例もない時期から取り組まれた、名古屋市美術館に於けるこどものための美術館活動についてお話しいただいた。

伊藤氏は、新しいことを試みる中で意識したこととして、美術館とは何か、美術とは何かを原点として、コレクションから考え、それによってやるべき手法がみえてきたと述べられたのが印象的であった。また、現在フリーランスとして外の立場から見た美術館の普及プログラムについても触られ、我々学芸員に対する今後の課題も提示していただいた。

次に村田真宏氏（愛知県美術館館長補佐）より「視覚障がいを持った方のための活動　愛知県美術館の活動」についてご紹介いただいた。村田氏の講義は、美術館に寄せられた潜在・顕在化した要望に向き合い、どう応えていったかという過程を詳細にお話しいただき、今後他館が取り組む際の指針となる内容であった。

最後に服部正氏（兵庫県立美術館学芸員）には、「アウトサイダー・アートと美術館」と題し、昨今、繰り返し紹介されながら、美術館学芸員として意識することが少ないアウトサイダー・アートの概念や、アウトサイダー・アートと美術館を取りまく課題等について大変明解にお話しいただいた。

研修会時間内には会場から特に質問の声もなく、会場の参加者の反応が読めなかった。しかし、研修会終了後に、急遽企画した講師3人を取り囲んでの交流会には、研修会の3分の1程の方が参加し、テーブルでは参加者の関心の高さを窺わせる会話が飛び交っていた。また後日、手紙や電話で研修内容に刺激を受けたという感想の声も寄せられ、なんとか研修会を締めくくることが出来た。

（担当：愛知県陶磁資料館　学芸員　佐藤一信）

お詫び

「おでかけガイド－愛知の博物館－（2008年10月～3月）」に写真掲載した「堀柳女《供花》（東京国立近代美術館工芸館所蔵）」は、画像データの処理を誤り、実物とはタテ・ヨコの比率の異なったものとなってしまいました。

読者の皆様を始め、ご所蔵館、碧南市藤井達吉現代美術館様に心よりお詫び申し上げます。

（愛知県博物館協会事務局）

「愛知の博物館」　No.89

発　行　日　平成21年3月31日

編集・発行　愛知県博物館協会

〒467-0806

名古屋市瑞穂区瑞穂通1丁目27番地の1

名古屋市博物館内

TEL〈052〉853-2655

FAX〈052〉853-3636